

英国病理学会に参加して

東京大学大学院医学系研究科 衛生学分野
加藤洋人

このたびご縁があり第 107 回日本病理学会総会において学術奨励賞を受賞させていただき、2019 年 7 月 2 日～4 日に開催された英国病理学会(Leeds Pathology 2019)へ派遣されて参加させていただきました。国際交流委員長の小田義直先生および審査委員の先生方には、貴重な機会を与えていただき心より感謝申し上げます。学会が開催された Harrogate という街は英国ヨークシャー地区にある田舎町のひとつで、Leeds Bradford 国際空港からバスで 30 分ほどの距離にあります。空港からの道中は牛、羊、馬、山羊が放牧された豊かな緑にあふれる牧草地帯が続いており、ついつい途中下車してしまいました。牧草地帯を抜けておもむろに現れた市街地には、おそらく 17 世紀くらいからあると思われる古い建物が散見され、いわゆる正統な British スタイルの建築美を感じる事ができたように思います。

学会では Molecular Pathology Pathways という Symposium で '*Immunogenomic Repertoire Profiling of Tumour-infiltrating B cells Reveals Sulfated-glycosaminoglycans to be Major Functional Humoral Antigens in Human Malignancies*'. と題する口演をしました。がん組織に浸潤する B 細胞がもつ免疫グロブリン遺伝子配列を次世代シーケンス解析から同定し、それらの配列情報から人工合成したヒト抗体の機能解析を進めた研究です。想定していた以上に突っ込んだ内容の質問をもらうことができ、今後の研究の展開にとって有意義な情報交換ができました。また、英国病理学会は参加者の約 1/3 が trainee (日本でいえば専門医を取得していない若手病理医の層)または学部学生だそうで、若手が経験を積む場としての側面が大きいように感じました。実際に若者たちと話してみると、しっかりとした将来像を持ちながら病理のトレーニングに勤しんでいる姿が表層にみえてくるとともに、「診断がキツイ」「研究が辛い」といった本音も耳に入ってきて、国は違っても若者の感じ方は似たようなものだと感じました。

英国病理学会では、学会を主催された Prof. Philip Quirke をはじめ Leeds 大学の皆さんにつねに目を掛けていただき、おかげさまでとても楽しくかつ有意義に過ごすことができました。特に、若き trainee である Dr. Caroline Young (写真)には心から感謝しています。いま思えば、その歓待ぶりは学会に出発する前からその片鱗を感じさせるもので、スケジュール調整や学会イベントへのお誘いまで、きめ細やかな連絡を頻繁にいただいております。また学会前日の 7 月 1 日には Prof. Quirke や Caroline の取り計らいで '*National Academic Trainees' Network Meeting*' という若手病理医のトレーニングコースに参加させていただきました。爆弾処理業をしている方からストレス耐性の講演を聞いたり、コンサルタントの方から職場における対話法の実践練習をさせられたり、日本における病理医としてのトレーニングでは味わえない興味深い経験をすることができました。

学術奨励賞受賞者として私と一緒に英国病理学会に参加された坂本直也先生とは、私と同じく米国 University of Michigan への留学経験があるという共通点があることが分かり(しかも研究室の建物とフロアまで同じ!）、共通の知人やステキハウスの話題で盛り上がる事ができました。世界は広いですが、研究者の世界は狭いものだとあらためて感じる事ができました。今後ともお互いがんばってまいりたいと思います。

今回の学術奨励賞受賞および英国病理学会への派遣については、多くの先生方のご指導とご支援の賜物と考えており心から感謝申し上げます。大学卒業後すぐ前理事長深山正久先生の門を叩くことで私の病理医としての道が始まりました。都立駒込病院では船田信顕先生、大橋健一先生、比島恒和先生から病理診断の基礎を、国立国際医療センターでは望月眞先生に病理解剖をご指導いただきました。国立がん研究センター研究所では廣橋説雄先生、金井弥栄先生、柴田龍弘先生からゲノム研究のご指導をいただきました。特に柴田龍弘先生の研究室では私の好きなペースで研究を進めさせていただき、そのとき経験したすべてのことが私の研究者としての基礎を作っていると感じます。病理専門医試験に際しては森正也先生(三井記念病院)と倉田厚先生(東京医大)からご声援をいただきました。また、大学院の2年先輩であり現在もずっと背中を追い続けている石川俊平先生(東大衛生学)、牛久哲男先生(東大人体病理学)、大田泰徳先生(東大医科研)、そして私を病理へ導いて頂いた松原大佑先生(自治医科大学)には格別の感謝を申し上げます。ふだんあまり病理の先生方とお会いする機会がございませんので、長くなりましたがこの場をお借りして謝辞を述べさせていただきました。

微力ではございますが、今後とも病理学の発展のために尽力させていただきましたら幸甚です。

令和元年 7月

